



現代の文学 = 17

林芙美子集



放浪記
うず潮
浮雲
晩菊

河出書房新社

現代の文学17 林芙美子集

芙美子

© 1965

責任編集

川端康成 丹羽文雄
円地文子 井上靖
松本清張 三島由紀夫

昭和40年1月1日 初版印刷
昭和40年1月8日 初版発行

定価 390円

著者 林 芙美子
発行者 河出孝雄
印刷者 高橋武夫
装 幀 原 弘 (N.D.C)

印刷・大日本印刷株式会社
本文用紙・本州製紙株式会社
函 貼・神崎製紙(ミラーコート)
同納入・東邦紙業株式会社
クロス・日本クロス工業株式会社
同納入・株式会社小島洋紙店

発行所 東京都千代田区 株式会社 河出書房新社
神田小川町三の八

電話東京 (291) 3721~7
振替口座 東京 10802

製本・美行製本

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

放浪記 三

うず潮 五

浮雲 二四

晩菊 四七

年譜 四九

解説 五二

和田芳恵

挿画 朝倉 撰

林
芙
美
子
集

放
浪
記

放浪記以前

私は北九州の或る小学校で、こんな歌を習った事があった。

更けゆく秋の夜 旅の空の
 飽しき思いに 一人なやむ

恋いしや古里 なつかし父母

私は宿命的に放浪者である。私は古里を持たない。父は四国の伊予の人間で、太物の行商人であった。母は、九州の桜島の温泉宿の娘である。母は他国者と一緒になつたと云うので、鹿児島を追放されて父と落ちつき場所を求めたところは、山口県の下関と云う処であった。私が生れたのはその下関の町である。——故郷に入れられなかつた両親を持つ私は、したがって旅が古里であつた。それ故、宿命的に旅人である私は、この恋いしや古里の歌を、随分飽しい気持ちで習つたものであつた。——八つの時、私の幼い人生にも、暴風が吹きつけてき

たのだ。若松で、呉服物の鞆売をして、かなりの財産をつくつていた父は、長崎の沖の天草から逃げて来た浜と云う芸者を家に入れていた。雪の降る旧正月を最後として、私の母は、八つの私を連れて父の家を出てしまったのだ。若松と云うところは、渡し船に乗らなければ行けないところだと覚えていた。

今の私の父は養父である。このひとは岡山の人間で、実直過ぎるほどの小心さと、アブノーマルな山ツ氣とで、人生の半分は苦勞で埋れていた人だ。私は母の連れ子になって、此の父と一緒にになると、ほとんど住家と云うものを持たないで暮して来た。どこへ行つても木賃宿ばかりの生活だった。「お父つあんは、家を好かんとじや、道具が好かんとじや……」母は私にいつもこんなことを云っていた。そこで、人生いたるところ木賃宿ばかりの思い出を持って、私は美しい山河も知らないで、養父と母に連れられて、九州一円を転々と行商をしてまわっていたのである。私をはじめて小学校へはいつたのは長崎であつた。ざつこく屋と云う木賃宿から、その頃流行のモスリン改良服と云うのをきせられて、南京町近くの小学校へ通つて行つた。それを振り出しにして、佐世保、久留米、下関、門司、戸畑、折尾と言つた順に、四年の間に、七度も学校をかわつて、私には親しい友達が一人も出来なかつた。

「お父つあん、俺アもう、学校さ行きとうななかバイ……」

せつぱつまった思いで、私は小学校をやめてしまったのだ。私は学校へ行くのが厭になつていたので。それは丁度、直方のうがたの炭坑町に住んでいた私の十二の時であつたろう。「ふうちゃんにも、何か売らせましようたいなあ……」遊ばせては、モッタイ、ナイ年頃であつた。私は学校をやめて行商をするようになったのだ。

*

直方の町は明けても暮れても煤すすけて暗い空であつた。砂で漉した鉄分の多い水で舌がよれるような町であつた。大正町の馬屋と云う木賃宿に落ちついたのが七月で、父達は相変らず、私を宿に置きっぱなしにすると、荷車を借りて、メリヤス類、足袋、新モス、腹巻、そういつた物を行李しんりに入れて、母が後押しで炭坑や陶器製造所へ行商に行つていた。

私には初めての見知らぬ土地であつた。私は三銭の小遣いを貰い、それを兵児帯へいごおびに巻いて、毎日町に遊びに出た。門司のように活気のある街でもない。長崎のように美しい街でもない。佐世保のように女のひとが美しい町でもなかった。骸炭がいたんのザクザクした道をはさんで、煤けた軒が不透明なあくびをしているような町だつた。

駄菓子屋、うどんや、屑屋、貸布団屋、まるで荷物列車のような町だ。その店先きには、町を歩いている女とは正反對の、これは又不健康な女達が、尖つた目をして歩いていて。七月の暑い陽ざしの下を通る女は、汚れた腰巻と、袖のない襦袢じゆばんきりである。夕方になると、シャベルを持った女や、空のモッコをぶら下げた女の群が、三五々ししゃべくりながら長屋へ帰つて行つた。流行歌のおいとこ、そうだよの唄が流行つていた。

私の三銭の小遣いは、双兒ふたご美人の豆本とか、氷饅頭こいしじょうのようなもので消えていた。——間もなく私は小学校へ行くかわりに、須崎町の粟おこし工場に、日給二十三銭で通つた。その頃、策さくをさげて買いに行つていた米が、たしか十八銭だつたと覚えてゐる。夜は近所の貸本屋から、腕うでの喜三郎や横紙破りの福島正則、不如帰ふじかへ、なごめ仲、渦巻などを借りて読んだ。そうした物語の中から何を教つたのだらうか？ メデタシ、メデタシの好きな、虫のいい空想と、ヒロイズムとセンチメンタリズムが、海綿のような私の頭をひたしてしまつた。私の周囲は朝から晩まで金の話である。私の唯一の理想は、女成金になりたいと云う事だつた。雨が何日も降り続いて、父の借りた荷車が雨にさらされると、朝も晩も、かぼちゃ飯で、茶碗を持つのがほんとうに淋しかつた。

*

この木賃宿には、通称シンケイ（神経）と呼んでゐる、坑夫上りの狂人が居て、このひとはダイナマイトで飛ばされて馬鹿になった人だと宿の人が云っていた。毎朝早く、町の女達と一緒にトロッコを押しに出かけて行く氣立ての優しい狂人である。私はこのシンケイによく虱を取ってもらったものだ。彼は後で支柱夫に出世したけれど、外に、鳥根の方から流れて来ている祭文語りの義眼の男や、夫婦者の坑夫が二組、まむし酒を売るテキヤ、親指のない淫売婦、サーカスよりも面白い集団であった。

「トロッコで疳されて指を取った云いよるけんど、嘘ばんだ、誰ぞに切られたつとじゃろ……」

馬屋のお上さんは、片眼で笑いながら母にこう云っていたものだ。或る日、この指のない淫売婦と私は風呂に行った。ドロドロの苔むした暗い風呂場だった。この女は、腹をぐるりと一卷きにして、臍のところへそに朱い舌を出した蛇の文身もんみをしていた。私は九州で初めてこんな凄い女を見た。私は子供だったから、しみじみ正視してこの薄青いこわい蛇の文身を見ていたものだ。

木賃宿に泊っている夫婦者は、たいてい自炊で、自炊でない者達も、米を買って来て炊いてもらっていた。

ほうろくのように焼けた暑い直方の町角に、そのころカチュウシヤの絵看板が立つようになった。異人娘が、頭から毛布をかぶって、雪の降っている停車場で、汽車の窓を叩いている図である。すると間もなく、頭の真ん中を二つに分けたカチュウシヤの髪が流行って来た。

カチュウシヤ可愛いや 別れの辛さ

せめて淡雪 とけぬ間に

神に願いを ララかけましようか。

なつかしい唄である。この炭坑街にまたたく間に、このカチュウシヤの歌は流行してしまった。ロシヤ女の純情な恋愛はよくわからなかったけれど、それでも、私は映画を見て来ると、非常にロマンチックな少女になってしまったのだ。浮かれ節（浪花節）より他に芝居小屋に連れて行ってもらえなかった私が、たった一人で隠れてカチュウシヤの映画を毎日見に行ったものであった。当分は、カチュウシヤで夢見心地であった。石油を買いに行く道の、白い夾竹桃けしきつばなの咲く広場で、町の子供達とカチュウシヤごっこや、炭坑ごっこをして遊んだりもした。炭坑ごっこの遊びは、女の子はトロッコを押す真似をしたり、男の子は炭坑節を歌いながら土をほじくって行くしぐさである。

そのころの私はとても元氣な子供だった。

一カ月ばかり勤めていた粟おこし工場の二十三錢也にもさよならをすると、私は父が仕入れて来た、扇子や化粧品を単色の風呂敷に背負って、遠賀川を渡り陸道を越して、炭坑の社宅や坑夫小屋に行商して歩くようになった。炭坑には、色々な行商人が這入り込んでゐるのだ。

「暑うしてたまらんなア」この頃私には、こうして親しく言葉をかける相棒が二人ばかりあった。「松ちゃん」これは香月から歩いて来る駄菓子屋で、可愛い十五の少女であったが、間もなく「青島」へ芸者に売られて行ってしまった。「ひろちゃん」干物屋の売り子で、十三の少年だけれど、彼の理想は、一人前の坑夫になりたい事だった。酒が呑めて、ツルハシを一寸高く振りかざせば人が驚くし、町の連鎖劇は無料でみられるし、月の出た遠賀川のほとりを、私はこのひろちゃんたちの話を聞きながら帰ったものだった。——その頃よく均一と云う言葉が流行っていたけれど、私の扇子も均一の十錢で、鯉の絵や、七福神、富士山の絵が描いてある。骨はがんじょうな竹が七本ばかりついている。毎日平均二十本位はかたづけていった。緑色のペンキのはげた社宅の細君よりも、坑夫長屋をまわった方がはるかに扇子はさばけて

いった。外にラッパ長屋と云って、一棟に十家族も住んでゐる鮮人長屋もあった。アンペラの畳の上には玉葱をむいたような子供達が、裸で重なりあつて遊んでゐた。

烈々とした空の下には、掘りかえした土が口を開けて、雷のように遠くではトロッコの流れる音が聞えてゐる。昼食時になると、蟻の塔のように材木を組みわたした暗い坑道口から、泡のように湧いて出る坑夫達を待つて、幼い私はあっちこっち扇子を売りに歩いた。坑夫達の汗は水ではなくて、もう黒い飴のようであつた。今、自分達が掘りかえした石炭土の上にゴロリと横になると、バクバクまるで金魚のように空気を吸つてよく眠つた。まるでゴリラの群のようだった。

そうしてこの静かな景色の中に動いてゐるものと云えば、棟を流れて行く昔風なモッコである。昼食が終るとあっちからもこっちからもカチュウシヤの唄が流れて來てゐる。やがて夕顔の花のようなカンテラの灯が、薄い光で地を這つて行くと、けたたましい警笛の音だ。囀る出るときや玉の肌……何でも無い唄声ではあるけれど、もうもうとした石炭土の山を見てみると何だか子供心にも切ないものがあつた。

扇子が売れなくなると、私は一つ一錢のアンパンを売りに歩くようになった。炭坑まで小一里の道程を、よく休

み休み私はアンパンをつまみ食いして行ったものだ。父はその頃、商売上の事から坑夫と喧嘩をして頭をグルグル手拭で巻いて宿にくすぽっていた。母は多賀神社のそばでバナナの露店を開いていた。無数に駅からなだれて来る者は、坑夫の群である。一山いくらのバナナは割によく売れて行った。アンパンを売りさばいて母のそばへ籠を置くと、私はよく多賀神社へ遊びに行った。そして大勢の女や男達と一緒に、私も馬の銅像に祈願をこめた。いい事がありますように。——多賀さんの祭には、きまって雨が降る。多くの露店商人達は、駅のひさしや、多賀さんの境内を行ったり来たりして雨空を見上げていたものだった。

十月になって、炭坑ヤカマシにストライキがあった。街中は、ジンと鼻をつまんだように静かになると、炭坑から来る坑夫達だけが殺気だつて活気があった。ストライキ、さりとて辛いね。私はこんな唄も覚えた。炭坑のストライキは、始終の事で坑夫達はさっさと他の炭坑へ流れて行くのだそうだ。そのたびに、町の商人との取引は抹殺されてしまうので、めったに坑夫達には品物を貸して帰れなかつた、それでも坑夫相手の商売は、てつとり早くてユカイだと商人達は云っていた。

*

「あんたも、四十過ぎとんなはつとじゃけん、少しは身を入れてくれんな、仕様がなかもんなた……」

私は豆ランプの灯のかけで、一生懸命探偵小説のジゴマを読んでいた。裾にさしあつて寝ている母が父に何時もこうつぶやいていた。外はながい雨である。

「一軒、家ちゆうもんを、定めんとあんた、こぎゃん時に困るけんな」

「ほんにヤカマシかな」

父が小声で呶鳴ると、あとは又雨の音だった。——そのころ、指の無い淫売婦だけは、いつも元気で酒を呑んでいた。

「戦争でも始まるとよかな」

この淫売婦の持論はいつも戦争の話だった。この世の中が、ひっくりかえるようになるかといふと云った。炭坑にうんと金が流れて来るといふと云っていた。「あんたは、ほんまによか生れつきな」母にこう云われると、指の無い淫売婦は、「小母っさんまで、そぎゃん思うとんなはると……」彼女は窓から何か投げつけては淋しそうに笑っていた。二十五だと云っていたが、労働者上りらしいプチプチした若さを持っていた。

十一月の声のかかる時であった。

黒崎からの帰り道、父と母と私は、大声で話しながら、軽い荷車を引いて、暗い遠賀川の堤防を歩いてきた。

「お母さん、お前も車へ乗れや、まだまだ遠いけに、歩くのはしんどいぞ……」

母と私は、荷車の上に乗っかると、父は元氣のいい声で唄いながら私達を引いて歩いた。

秋になると、星が幾つも流れて行く。もうじき、街の入口である。後の方から、「おっさんよっ」と呼ぶ声があった。渡り歩きの坑夫が呼んでいるらしかった。父は荷車を止めて「何ぞ！」と呼応した。二人の坑夫が這いながらついて来た。二日も食わないのだと云う。逃げて来たのかと父が聞いていた。二人共鮮人であった。折尾まで行くのだから、金を貸してくれと何度も頭をさげた。

父は沈黙って五十銭銀貨を二枚出すと、一人ずつに握らせてやった。堤の上を冷たい風が吹いて行く。茫々とした二人の鮮人の頭の上に星が光っていて、妙にガクガク私たちが慄えていたが、二人共一円もらうと、私達の車の後を押して長い事沈黙って町までついて来た。

しばらくして父は祖父が死んだので、岡山へ田地を売りに帰って行った。少し資本をこしらえて来て、唐津物を糶売りをしてみたい、これが唯一の目的であった。何によらず炭坑街で、てっとり早く売れるものは、食物で

ある。母のバナナと、私のアンパンは、雨が降りさえしなれば、二人の食べる位は売れて行った。馬屋の払いは月二四二十銭で、今は母も家を一軒借りるより此方が楽だと云っていた。だが、どこまで行ってもみじめすぎる私達である。秋になると、神経痛で、母は何日も商売を休むし、父は田地を売ってたった四十円の金しか持って来なかった。父はその金で、唐津焼を仕入れると、佐世保へ一人で働きに行ってしまった。

「じき二人は呼ぶけんのう……」

こう云って、父は陽に焼けた厚司一枚で汽車に乗って行った。私は一日も休めないアンパンの行商である。雨が降ると、直方の街中を軒並にアンパンを売って歩いた。このころの思い出は一生忘れることは出来ないのだ。

私には、商売は一寸も苦痛ではなかった。一軒一軒歩いて行くと、五銭、二銭、三銭と云う風に、私のこしらえた財布には金がたままって行く。そして私は、自分がどんなに商売上手であるかを母に賞めてもらうのが楽しみであった。私は二カ月もアンパンを売って母と暮した。或る日、街から帰ると、美しいヒビ色の兵児帯を母が縫っていた。

「どぎゃんしたと？」

私は驚異の眼をみはったものだ。四国のお父つあんから送って来たのだと母は云っていた。私はなぜか胸が鳴

っていた。間もなく、呼びに帰って来た養父と一緒に、私達三人は、直方を引きあげて、折尾行きの汽車に乗った。毎日あの道を歩いたのだ。汽車が遠賀川の鉄橋を越すと、堤にそった白い路が暮れそめていて、私の眼に悲しくうつるのであった。白帆が一ツ川上へ登っている、なつかしい景色である、汽車の中では、金鎖や、指輪や、風船、絵本などを売る商人が、長い事しゃべり続けていた。父は赤い硝子玉のはいつた指輪を私に買ってくれたりした。

(十二月×日)

さいはての駅に下り立ち

雪あかり

さびしき町にあゆみ入りにき

雪が降っている。私はこの啄木の歌を偶々と思ひ浮べながら、郷愁のようなものを感じていた。便所の窓を明けると、夕方の門燈が薄明るくついでいて、むかし信州の山で見たしやくなげの紅い花のようで、とても美しかった。

「婢やアお嬢ちゃんおんぶしておくれッ！」

奥さんの声がしている。

あああの百合子と云う子供は私には苦手だ。よく泣くし、先生に似ていて、神経が細くて全く火の玉を背負っているような感じである。——せめてこうして便所にはいつている時だけが、私の体のような気がする。

(バナナに鰻、豚カツに蜜柑、思いきりこんなものが食べてみたいなア)

気持ちが悪しくなつてくると、私は妙に落書きをしたくなつてくる。豚カツにバナナ、私は指で壁に書いてみた。

夕飯の支度の出来るまで赤ん坊をおぶって廊下を何度も行ったり来たりしている。秋江氏の家へ来て、今日で一週間あまりだけれど、先の目標もなさそうである。この先生は、日に幾度も梯子段を上つたり降りたりしている。まるで廿日単のようだ。あの神経には全くやりきれない。

「チャンチンコイチャン！ よく眠つたかい！」

私の肩を覗いては、先生は安心をしたようにじんじんばしよりをして二階へ上つて行く。

私は廊下の本箱から、今日はチェーホフを引っぱり出して読んだ。チェーホフは心の古里だ。チェーホフの吐息は、姿は、みな生きて、黄昏の私の心に、何かプツプツものを云いかけて来る。柔かい本の手ざわり、この

先生の小説を読んでいると、もう一度チェーホフを読んでもいいのと思った。京都のお女郎さんの話なんか、私には縁遠い世界だ。

夜。

家政婦のお菊さんが、台所で美味しそうな五目寿司を拵つくろえているのを見てとても嬉しくなった。

赤ん坊を風呂に入れて、ひとしずまりすると、もう一時である。私は赤ん坊と云うものが大嫌いなものだけれど、不思議な事に、赤ん坊は私の背中におぶさると、すぐウトウトと眠ってしまつて、家の人達が珍らしがっている。

お蔭で本が読めること——。年を取つて子供が出来る、仕事も手につかない程心配になるのかも知れない。反感がおきる程、先生が赤ん坊にハラハラしているのを見ると、女中なんて一生するものではないと思つた。

うまごやしにだつて、可憐な白い花が咲くつて事を、先生は知らないのかしら……。奥さんは野そぢぢな人だけれど、眠つたようなひとで、この家では私は一番好きなひとである。

(十二月×日)

ひまが出るなり。

別に行くところもない。大きな風呂敷包みを持って、

汽車道の上に架つた陸橋の上で、貰つた紙包みを開いて見たら、たつた二円はいつていた。二週間あまりも居て、金二円也。足の先から、冷たい血がががるような思ひだつた。——ブラブラ大きな風呂敷包みをさげて歩いていると、何だかザラザラした気持ちで、何もかも投げ出したくなつてきた。通りすがりに蒼い瓦葺きの文化住宅の貸家があつたので這入つてみる。庭が広くて、ガラス窓が十二月の風に磨いたように冷たく光つていた。

疲れて眠たくなつていたので、休んで行きたい気持ちなり、勝手口を開けてみると、錆びた罐詰のかんからがゴロゴロ散らかつていて、座敷の畳が泥で汚れていた。屋間の空家は淋しいものだ。薄い人の影があそこにもここにもたらずんでいるようで、寒さがしみじみとこたえて来る。どこへ行こうというあてもないのだ。二円ではどうにもならない。はばかりから出て来ると、荒れ果つた縁側のそばへ狐のような目をした犬がじつと見ていた。

「何でもないんだ、何でもありゃしないんだよ」

言いきかせるつもりで、私は縁側の上へ屹まがとつたつていた。

(どうしようかなア……、どうにもならないじゃないのッ！)

夜。

新宿の旭町の木賃宿へ泊った。石崖の下の雪どけで、道が鉛ひたこのようにこねこねしている通りの旅人宿に、一泊三十銭で私は泥のような体を横たえることが出来た。三畳の部屋に豆ランプのついた、まるで明治時代にあってはいない私は、私を捨てた島の男へ、たよりにもならない長い手紙を書いてみた。

みんな嘘っぱちばかりの世界だった

甲州マヅ行きの終列車が頭の上を走ってゆく

百貨店マツヤの屋上のように寥々りようりようとした全生活を振り捨てて

私は木賃宿の布団に静脈を延ばしている

列車にフンサイされた死骸を

私は他人のように抱きしめてみた

真夜中に煤けた障子を明けると

こんなところにも空があつて月がおどけていた。

みなさまさよなら！

私は歪ゆがんだサイコロになってまた逆もどり

ここは木賃宿の屋根裏です

私は堆積された旅愁をつかんで

飄々ひょうひょうと風に吹かれていた。

夜中になつても人が何時までもそうぞうしく出はいりをしていゝ。

「済みませんが……」

そういつて、ガタガタの障子をあけて、不意に銀杏返しに結つた女が、乱暴に私の薄い布団にもぐり込んで来た。すぐそのあとから、大きい足音がすると、帽子もかぶらない薄汚れた男が、細めに障子をあけて声をかけた。

「オイ！ お前、おきろ！」

やがて、女が一言二言何かつぶやきながら、廊下へ出て行くと、パチンと頬を殴る音が続けざまに聞えていたが、やがてまた外は無気味な、汚水のような冥々とした静かさになった。女の乱して行つた部屋の空気が、伸々しずまらない。

「今まで何をしていたのだ！ 原籍は、どこへ行く、年は、両親は……」

薄汚れた男が、また私の部屋へ這入つて来て、鉛筆を嘗めながら、私の枕元に立っているのだ。

「お前はあの女と知合いか？」

「いいえ、不意にはいつて来たんですよ」

クヌウト・ハムスンだつて、こんな行きがかりは持た

なかつただろう——。刑事が出て行くと、私は伸々と手足をのばして枕の下に入れてある財布にさわってみた。残金は一円六十五銭也。月が風に吹かれていよう、歪んだ高い窓から色々な光の虹が私には見えてくる。——ピエロは高いところから飛び降りる事は上手だけれど、飛び上って見せる芸当は容易じゃない、だが何とかなるだろう、食えないと云うことはないだろう……。

(十二月×日)

朝、青梅街道の入口の飯屋へ行った。熱いお茶を呑んでいると、ドロドロに汚れた労働者が駈け込むように這入って来て、

「姉さん！ 十銭で何か食わしてくんないかな、十銭玉一つきりしかないんだ」

大声で云って正直に立っている。すると、十五六の小娘が、

「御飯に肉豆腐でいいですか」と云った。

労働者は急にニコニコしてバンコへ腰をかけた。

大きな飯丼。葱と小間切れの肉豆腐。濁った味噌汁。

これ丈けが十銭玉一つの栄養食だ。労働者は天真に大口あけて飯を頬ばっている。涙ぐましい風景だった。天井の壁には、一食十銭よりと書いてあるのに、十銭玉一つきりのこの労働者は、すなおに大声で念を押しているの

だ。私は涙ぐましい気持ちだった。御飯の盛りが私のより多いような気がしたけれども、あれで足りるかしらとも思う。その労働者はいたって朗かだった。私の前には、御飯にごった煮にお新香が運ばれてきた。まことに貧しき山海の珍味である。合計十二銭也を払って、のれんを出ると、どうもありがとうと女中さんが云ってくれる。お茶をたらふく呑んで、朝のあいさつを交わして、十二銭なのだ。どんづまりの世界は、光明と紙一重で、ほんとに朗かだと思う。だけど、あの四十近い労働者の事を思うと、これは又、十銭玉一ツで、失望、どんぞこ、墜落との紙一重なのではないだろうか——

お母さんだけでも東京へ来てくれれば、何とかどうにか働きようもあるのだけれど……沈むだけ沈んでチンポツしてしまつた私は難破船のようなものだ。飛沫がかかるところではない。ザンブザンブ潮水を呑んで、結局私も昨夜の淫売婦と、そう変つた考えも持っていやしな。あの女は三十すぎでいたかも知れない。私がもしも男だったら、あのまま一直線にあの夜の女に溺れてしまつて、今朝はもう二人で死ぬる話でもしていたかもしれぬ。

屋から荷物を宿屋にあずけて、神田の職業紹介所に行つてみる。